

# 「中国と日本は何処が違うか」という文集の前書き

張 榮 湄

私は教養学科、食物栄養科、英語コミュニケーション学科の教養科目として中国語を担当している。1999年度と2000年度の授業が終わった後に「中国と日本は何処が違うか—— 中国語の授業を一年間受けた学生の目を通して」という文集を編集した。ここで掲げているのはこれらの文集を編集した時に書いた前書きである。

「中国と日本は何処が違うか」はどんな文集であるか。なぜこれらの文集を編集したのか。これらの文集をどのように編集してきたのか。学生が中国語の授業を通じて、中国のどのようなことに触れてきたのか、文集第2号（2000年度号）は第1号（1999年度号）に比べ、どこを改善したのか。ここで掲げている前書きとその付録はこれらの疑問に答えている。また昨年度『北陸学院短期大学紀要2000年号』で「中国人教師としての考え方と授業実践」という文章を発表したが、それをより具体化したものが、これらの前書きに書いてある。

以下が「中国と日本は何処が違うか—— 中国語の授業を一年間受けた学生の目を通して」という文集の前書きとその付録の一部である

## 前書き（第1号・1999年度号）

ここに集めた「比較・感想文」は、1999年度中国語を受けた学生が自ら中国語の文章を翻訳し、そこから得られた中国の事情を日本と比較・検討して書いたものである。

一年間の中国語の授業で「中国語の基礎的、実用的な能力を身に付けるのと同時に、中国文化・言語や生活・習慣に対する興味や関心を高め、また日本語や日本文化についての理解を深める」という目標を、どのように実現するか、限られた時間の中でいかに具体化するかということを考えてきた。教育の現場に立って、何年か考えた結果は、やはり日本人は漢字になじみ、中国語を読むのに上達が速いという点を活用することである。

周知のように日本と中国は地理的に近い、しかも同じ漢字文化圏に属し、両国の文化や生活習慣は似ている所が多いと言われるが、よくみると両国の違う所も実際は少なくない。両国のこれらの違いをテーマとする中国語の文章の翻訳に学生自らチャレンジさせる。具体的には前・中期に中国語の基礎的、実用的な能力を修得し、中国語がある程度身についた学生に、後期に教師は用意した中国語の文章の中で、各自が興味のあるテーマを選んで、基本的に各自で辞書を利用しながら、中国語を日本語に翻訳する。この翻訳から得られた中国の文化・知識や生活習慣を日本と比較したり、

## 張 榮 湄

検討したりして、自分なりの「比較・感想文」にまとめる。これに基づいて、自分の翻訳した文の中で最も印象深いものを中国語で発表し、自分で書いた「比較・感想文」を日本語で発表する。他の学生は中国に関するいろいろなテーマの発表を聞くことによって中国文化や習慣の理解を広げていく。

このようなやり方で、以上の授業の目標に近づくことができると考えている。ここに集まったのは、この発表の元となる学生が書いた「比較・感想文」である。

この試みのよい所は、学生にはマスターしたばかりの中国語を使う場を提供する一方で、自分の力で日本と異なる世界を見つけ出し、同時に日本文化や習慣も考えさせるようにしたことである。学生からは「中国語の勉強と同時に中国の文化もいろいろと知ることができて、良かったです。」と感想も得られた。また「文集」を読めば、学生がある程度自分が興味のあるものや自主的に勉強できるし、中国語の基礎的、実用的な能力もある程度身に付いた。特に自分のテーマに関して両国のことが書かれた部分の中国語が印象深かったようである。ほぼ目標を達したと言えるだろう。ただこのやり方は、学生の中国語のレベルに相応しい、学生に興味ある中国語の文を探すのが難しい。

この試みは1998年度から始めた。今年度はコンピューターを用いて作ったという点で、形としては以前より少し進歩したかもしれない。しかしコンピューターで直接文章を作成したためか、一回の授業で仕上げるといった時間の制約があったためか、こちらの指導不十分であったのか、その原因はわからないが、全体的に見て、文章の出来が前年度に及ばないような気がする。でも中国語を一年間しか勉強していない学生から日本以外にどのような異なる世界があるということかを多くの人々に伝えることが出来てうれしく思う。またこの文集は学生にとっては自分の成長の記録であり、外国人教師にとっては母語を教える中で異文化交流の架け橋を作ることに自分が微力ながら尽くしたかの足跡でもある。

## 前書き(第2号・2000年度号)

文集第二号をお届けする。ここに集めたのは、昨年度と同様、学生がある程度中国語を学んだ、そのまとめとして、中国語の文章を日本語に自ら翻訳し、それを通して知り得た中国の事情や文化・習慣を日本のものと比較・検討して書いた「比較・感想文」である。これは1998年度から始めたもので、1999年度の学年末アンケートにおいて学生の好評を得て、2000年度、再び実行することになった。

目的は昨年業と同じで、学生にマスターしたばかりの中国語を使う場を提供するとともに、自分の力で日本と異なる世界を見つけ出すことによって、日本文化や習慣を考えさせることにある。また自ら翻訳して得られたものを「比較・感想文」にまとめ、発表することによって、中国に対する理解を広げていくという狙いもある。

手順や方法も昨年度と殆ど変わりはなく、教師が用意した中国語の文章の中から、各自が興味のあるテーマを選び、(基本的に)辞書を利用しながら、中国語を日本語に翻訳する。この翻訳から

## 「中国と日本は何処が違うか」 いう文集の前書き

得られた中国の文化や生活習慣を日本と比較したり、検討したりして、最終的に最も印象深い文を選んだり、自分なりの「比較・感想文」にまとめたりする。

ただ、いくつか改善した点がある。先ず翻訳文のテーマの数は昨年度と比べ、19から34に増加した。その中には特に学生が関心を持っている“中国の一人っ子政策”、“今の中国の服装”、“中国の外来語”などの話題を取り入れた。また翻訳文の一部はより長く、より難しいものを取り入れた。これらの文は、余裕のある学生に翻訳させたり、人数の少ないクラスの（14人）課題としてやってみた（注1）。教師としては、一人一人の指導時間を十分にとった上で試みたい内容だが、実際には学生は殆ど辞書を利用して自力で翻訳してくれた。

次に、「比較・感想文」をコンピューターで作成する前に、「比較・感想文」を書くための資料調べや下書きを作る時間は昨年度より少し多めに設け、より具体的で細かな指導を全員に行ってようにした。例えば「比較・感想文」の構成については、翻訳して分かったこと、日本とどこか違うのか、なぜそんな違いが生まれるのか、さらに自分の感想という四つの部分から構成するようにアドバイスにした。その結果、文章の出来に少し改善の傾向が見られたし、より長い文を書く学生も現れた。特に自分自身興味をもてるテーマについては、よい「比較・感想文」が出された。

もう一点は、今年度は「比較・感想文」だけでなく、中国語の文章を日本語に翻訳するのにもコンピューターを用いるようにしたことである。早目にコンピューターに触れることによって、「比較・感想文」をコンピューターで作成する際、随分作業が楽になったようだ。おかげでこの文集の最後には、より多くの翻訳文を付録することが出来た。

ただ、翻訳文の中で最も印象深い文を中国語で引用する部分は、コンピューターを利用することが出来ず、手書きせざるを得なかった。今後学校のコンピューターにも中国語で文章を作成するソフトが入れられればと思う。学生にコンピューターで中国語を入力する経験もさせたいからだ。

この文集の多くの「比較・感想文」の最後に、“中国に興味をもてたので、一度行きたい”とか、“中国の文化などにも興味を持つことが出来たので、中国についていろいろ知りたい”とか、“日本と中国の違いが分かってよかった”とか、“この授業は中国の文化に触れるよいきっかけとなった。”という感想が寄せられた。学生によって書かれたこれらの言葉は、一年間の中国語の授業にとって何よりの評価であると思っている。

注1：2000年度は中国語を受ける学生の人数は、全体に前の年より多く、クラスは一つ増加した。ただ人数の少ないクラスもある。

付 録

目 次 (第2号・2000年度号)

前書き		教 師 張 榮 湄
翻訳文の題名	比較・感想文の題名	学 科 学生氏名
1 中国の一人っ子の政策	日本と中国の違いとその感想	教養科 北村優子
	社会のあり方左右される子供達	英語科 松尾奈奈
	一人っ子について	食栄科 安江有加
2 今の中国式の服装	日本と中国の違いとその感想	教養科 桑山志織
	中国の正装	英語科 中嶋梨絵
	中国の服装	英語科 勝二美奈
3 中国の地図	比較と感想	教養科 宮麻由子
4 中国人の挨拶	中国人と日本人の挨拶の仕方の比較と感想	教養科 松野有里子
	あいさつについて	食栄科 木下 子
5 中国の呼称	‘同志’と‘師傅’を訳して	教養科 東麻衣子
6 中国人の名前3	中国人の名前と日本人の名前	教養科 小川絢子
7 中国人の諺	ことわざ・中国と日本の比較	教養科 任田未希
8 中国語中の‘江’と‘河’	地名の語源	教養科 佐藤美江
9 中国語中の‘紅’と‘赤’	中国語と日本語	教養科 大林功美子
	中国語の古文	英語科 福村佳子
10 中国のタブー‘魚’と‘梨’	タブーについて	教養科 西村有希子
	語学を勉強するにあたって	英語科 池田恵理香
11 中国の外来語	中国と日本の外来語	教養科 北川智枝子
12 中国の方言	方言について	食栄科 佐々木麻由
	方言と共通語	英語科 倉部可緒里
13 中国の川－黄河	川について	食栄科 橋 裕美
	中国の偉大さ	英語科 大えき希
14 中国人の名前	名前について関心の深さ	英語科 松岡美幸
	名前に込められる親の想い	英語科 羽部里美
	中国と日本の名前の付け方	英語科 中川梨絵
	中国人と日本人の名前の違いと共通点	食栄科 表由美子
15 中国の婚俗	変化する結婚	食栄科 石浦真理
16 中国の正月	中国と日本の正月を比較して	英語科 山腰瑠美
	日本と中国の文化の違い	食栄科 石蔵裕香
	中国人の正月について	食栄科 五影堂千晴
17 中国人のタブー	中国と日本の違い	食栄科 島田希

「中国と日本は何処が違うか」いう文集の前書き

	中国人のタブー	英語科	谷口真紀
	比較・感想文	英語科	浅川美歌
	文化の違い	食栄科	川江千春
18中国人の呼称	呼び方について	食栄科	佐々木京子
	中国人の呼称	食栄科	藤野梨花
19中国人と色	色に関して日本人と中国人の感じ方の比較	英語科	前田智江
	色について	食栄科	中村香織
	色について	食栄科	福田七穂
20客好きな中国人	中国人のお客のもてなし方について	英語科	林江里子
	中国人のお客のもてなし方	英語科	前田真由美
	中国人について	食栄科	中井貴子
21中国人の人情	中国人と日本人の人情の違い	英語科	大形由依
	中国人の絆の深さ	食栄科	若山みゆき
	中国人と日本人の価値観の違い	英語科	金田真実
	中国人の絆の深さ	食栄科	前三菜世
22中国人の朝	日本と中国の共通点と違い	英語科	西野加那子
	日本にない習慣	食栄科	疋津真季
23中国人の朝食	朝食	食栄科	中 恵子
24中国人の食事	中国と日本の食文化の違い	英語科	岡山寛美
	比較と感想	食栄科	右近彩香
25中国人と睡眠	日本と中国の睡眠の違いについて	英語科	扇沢晴子
	中国の睡眠について	食栄科	黒川綾子
26中国人と散歩	日本と中国人の散歩に対する考え方の違い	食栄科	茨木奈緒美
	日本と中国人の散歩における比較	英語科	柏麻有子
27中国人と家事	中国と日本の家事を比較して	英語科	長崎貴子
	中国人の主人・日本の主人	食栄科	堀田理絵
28中国人の週末	週末	食栄科	森国美幸
	中国の魅力	英語科	岸 恵美
29中国の自転車	それぞれの国の便利さ	英語科	角田裕加里
30中国の卓球	卓球のことについて中国と日本の違い	英語科	岡島奈津
	卓球について	食栄科	吉野佳奈恵
31中国人のお茶	中国語の文「茶」を翻訳して	教養科	谷口梢子
	中国のお茶	英語科	雄谷彩子
	中国のお茶について	食栄科	酒井千夏
32 中国の食べ物一瓜の種	小さな種	教養科	瀧谷亜弥

張 榮 湄

	中国と日本と瓜子(種)・感想 種について	英語科 荒井万衣子 食栄科 渡辺真希
33ギョーザ	中国と日本の餃子の立場 ギョーザについて	英語科 本尾愛子 食栄科 柿本有希
34中国正月の食べ物ー元宵	日本と中国人のお正月 団子と正月 日本と中国の正月料理 もち団子	教養科 西井真知子 英語科 中村朋子 食栄科 中山美貴子 食栄科 今村絵里子

\*英語科は英語コミュニケーション学科二年、教養科は教養学科二年、食栄科は食物栄養学科一年の略称である。

\*以上のテーマは荒屋勸、徐迎新『中国人暮らしのエッセンス』（朝日出版社、2001年）、日下恒夫ら『ことばの旅』（好文出版、1991年）、荒屋勸、伊景春、阿部博幸『中国と日本』（朝日出版社、1992年）、荒屋勸、徐迎新『中国人暮らしのスケッチ』（朝日出版社、1998年）によるものである。